

## /所/蔵/資/料/紹/介/ ケンペルの見た日本

### 1. 鎖国時代の日本情報

1853年、開国を求めてアメリカからやってきた黒船の主、ペリー提督。その彼が、未知の国日本と交渉するにあたり、船に携えてきた2つの日本関係書物があります。それは、シーボルトの『日本』(1827)と、ケンペルの『日本誌』(1727)でした。

18~19世紀の欧米は、オランダ商館の医師として来日したこの二人のドイツ人を通して日本を知ったといっても過言ではありません。特に、厳しい鎖国政策をとる元禄時代の日本について詳細に紹介したケンペルの著作は、その後一世期半もの間、欧米人が日本について言及する際に必ず引用された比類のない書でした。

今回はこのケンペルの足跡を辿りながら、最近入手したケンペル関連資料をご紹介します。

### 2. ケンペルの日本への道すじ

エンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer 1651~1716) は、ドイツのレムゴーで牧師の次男として生まれました。17歳で生地を出て、ヨーロッパ各地で諸学を修めた後、ウプサラ大学(スウェーデン)遊学中の31歳の時、スウェーデン国王のペルシア使節団書記官に採用されたのがきっかけで、アジアにいたる長い旅に出ることになります。

1683年ストックホルムを出発し、モスクワ、ペルシアの各都市に滞在し、さらに、ジャワ、シャム王国(現タイ)を経て、1690年9月ついに日本の長崎までやってきます。

長崎にはそのまま2年1ヶ月余り滞在しますが、その間、1691、1692年のオランダ商館長の江戸参府に随行し、将軍綱吉にも謁見しています。そして、この日本滞在を長い旅の終着点として帰国し、1716年にその生涯を終えるまで、その後の人生を研究と執筆にあてました。

その彼が生前に刊行できた唯一の書物が、昨年度入手した『廻国奇観』と呼ばれるものです。

### 3. *Amoenitatum Exoticarum...* 『廻国奇観』



【292.209 K9204 図 貴重】

ケンペルのスウェーデンから日本に至る大旅行記をラテン語で記述したもので、1712年に出版されました。原題の意は「異邦の魅力」ですが、日本では、『廻国奇観』と呼ばれています。有名な鎖国論を始め、後述の『日本誌』の付録に再録された報告、図版も含まれています。ケンペルが序文の中で「今日の日本」の完成を告げていることから、日本に関する記述は後の出版を予定していたため一部省かれているのか、大半はペルシアに関する記述となっています。しかし、この書は『日本誌』と並んで、ヨーロッパ人の日本観の形成に大きな影響を与え、特に第5部「日本の植物」の章は、欧米人による日本の植物研究の嚆矢として必ず言及されるものとなっています。



杏



銀杏

ケンペルによって初めてヨーロッパに紹介された植物

刊行後、『廻国奇観』は同時代の日本でもよく知られるところとなり、出島の三学者としてケンペル、シーボルトと並び称されるツンベルクから若狭の蘭学者、医者である中川淳庵に贈られたことがわかっています。

#### 4 . The History of Japan.... 『日本誌』



ショイヒツェル編集のケンペルの日本地図

ケンペルの死後、遺稿、蔵書は遺言により甥に譲られました。しかし、経済的な理由でケンペルの遺産は売られることになり、日本関係の原稿・資料類は『日本誌』の出版を条件にイギリスのハンス＝スローン卿が購入しました。ケンペルの残した『日本誌』のドイツ語の草稿は、当時スローン卿の個人文庫の管理をしていたスイス人ショイヒツェルによる校訂、英訳を経て、詳しい解説とケンペル略伝を付して1727年に出版されました。

この書は、日本に関する一般的記述の他、政治、宗教、貿易に関する詳細な記述と、二度の江戸参府日記からなる5編と、茶、製紙法、鍼、灸、竜涎香、鎖国についての論文からなる付録で構成されています。イギリス国王にも献呈されたこの書は、ヨーロッパ中に大きな反響を呼び、翌年ロンドンの2つの書店からすぐ再版されます。また、英語版から、1729年には早くもフランス語版、オランダ語版が翻訳出版され、1749年にはデュ・アルデの『中国帝国誌』に含まれていたフランス語版を元にしてドイツ語版が出版されました。

この、ショイヒツェル編集の『日本誌』の他に、もう一つのケンペルの『日本誌』があります。これは、1773年ケンペルの姪の死去後発見されたドイツ

語原稿を元にしたものです。後のプロシアの外交官、歴史家としても活躍するドームによる校訂を加えて1777～1779年にかけて出版されました。

この2つの『日本誌』はどちらも元原稿が失われており確認しようがありませんが、偏見のない客観的で正確なケンペルの記述は、いずれも翻訳者、校訂者により書き換えられている部分が多いといわれています。しかし、この書は全体として今までにない正確な日本像を著しているため、ツンベルク、シーボルトはもちろんのこと、日本に来る誰もが目を通す資料として時代を超えて尊重されました。

本学では、ショイヒツェルの英語版第二版(1728)フランス語版(1732)、オランダ語版(1733)を所蔵しています。注

#### 5 . Papers of Engelbert Kaempfer....

『ケンペル手稿集成』【FM290 E9112 22～31】

前述のスローン卿は大英博物館の創始者となったため、彼の手稿を含むケンペル・コレクションは現在大英博物館・大英図書館に保管されています。今までこれらの資料は現地でしか利用できなかったため、研究には大変な困難が伴いましたが、一昨年欧文手稿の部分がマイクロフィルム化されたので、この度購入の運びとなりました。そこには彼の肉筆の絵や原稿が収められており、研究執筆のなまなましい過程を垣間見ることができます。また出版された書物が後世の編集者・翻訳者らによってどのように変更が加えられたのかも見て取れます。



七福神に関するケンペルのノート

例えば右の図は、前掲の 七福神に関するケンペルのノート と ショイヒツェル編集のケンペルの日本地図 の一部ですが、ケンペルがスケッチした福祿寿は、『日本誌』ではその長い頭にターバンを巻き、顔立ちも西洋風になっています。ショイヒツェルは、このようにケンペルの『日本誌』原稿からだけでなく、ケンペル所蔵の資料や、スケッチを駆使して編集にあたりました。

本学では文化交流史関係資料の充実に努めていますが、今回ご紹介したケンペルの資料は、その原資料と草稿、また翻訳書も合わせて多数所蔵する資料群を形成しています。

注：いずれも今出川図書館貴重室に所蔵しています。〔下記〕

英語版【291.09 K8-2A】【291.09 K9211】フランス語版【291.09 K8-2C】オランダ語版【291.09 K9205】



これらの資料に触れて、ケンペルの類い稀な好奇心、また記録をとり後世へ伝えようとする飽くなき努力の足跡を目にするだけでも、意味あることと信じて疑いません。



## 日・EUフレンドシップウィーク at 同志社大学

5月20日(月)~25日(土)は同志社大学で日・EUフレンドシップウィークを開催します。

タイトルのとおり、日本とEU(欧州連合)の友好を目指す企画です。駐日欧州委員会代表部との共催で5月9日の「ヨーロッパデー」を中心に、全国でいろいろなイベントが計画されています。

同志社大学にはEU資料センターが設置されていることもあり、今回の日・EUフレンドシップウィーク参加の運びとなりました。みなさん奮ってご参加ください。なお、すべてのイベントは一般市民にも公開します(入場無料)。

公開講演会「欧州統合の歩み - 過去・現在・未来」  
5月23日(木) 2講時 明德館21番教室  
講師に駐日欧州委員会代表部公使のナイジェル・エバンズ氏をお招きして欧州統合についてのオープンレクチャーを開催します。

シンポジウム メインテーマ「欧州統合の現状」  
5月24日(金) 13時~17時 同志社礼拝堂

同志社大学におけるEU研究者によるシンポジウムです。さまざまな切り口で欧州統合をとらえます。

基調講演 嶋田 巧 助教授(商学部)

早川 勝 教授(法学部)

釜田 泰介 教授(法学部)

コーディネーター 鷲江 義勝 助教授(法学部)

ユーロ展・EU資料展 今出川図書館 地階  
5月20日(月)~25日(土) 10時~19時(25日は12時まで)  
2002年1月よりスタートしたユーロ通貨を通じてEUの経済的な側面を紹介します。通貨統合までの歴史的な歩みと現在の状況や、それぞれデザインの異なる各国のコインなど、パネルにして展示します。

ユーロ展とあわせてEU資料の展示もします。

今出川図書館1階東の「EU資料センター」では、ルクセンブルクの欧州委員会出版局から官報、月報、年報をはじめとするたくさんの出版物の送付をうけています。この中から主な資料を展示します。

お気軽にお立ち寄りください。